復興への絆

～東日本大震災災害派遣レポート～ Vol.1

市では、東日本大震災以降、東北地方に対し支援活動を行っています。また、南三陸町を重点支援地域と決め、さまざまな支援を行っています。その一つとして、昨年より職員の派遣を行っています。今月号より不定期ですが、“復興への絆”と題し、現地の様子や支援の状況を掲載していきます。

災害派遣を終えた石川伸吾副参事

私は、平成23年10月から半年間、宮城県南三陸町役場に派遣され、震災復興推進課および復興企画課で勤務してきました。

津波により南三陸町は、千人近い人的被害（死亡・行方不明）、全世帯の住宅の3分の2が全半壊のほか、数々の大きな被害を受けました。文字どおり壊滅状態です。

さて、私は派遣で主に南三陸町復興計画の策定および国から交付される復興交付金を受けるための各種計画書や申請書の作成を担当しました。

これからの南三陸町の復興計画の基本となる考え方は、「高台移転」です。歴史上、何度も津波の被害を受けてきた南三陸町は、津波から町を防潮堤で「守る」、それでも津波が超えてきた場合は、高台へ「逃げる」という形で津波対策を行ってきました。

しかし、今後は、これまでの「守る」と「逃げる」に加えて、住まいを「高台に移転し」、「一人の人命も失わない」という姿勢を基本に置くことにしました。

そもそも町を復興させるためには、現地復旧の方が安く、そして早く済みます。一方、高台移転は、手続きや工事に時間がかかり、多くの費用が生じます。それにもかかわらず、計画策定会議や町民会議でも高台移転が多くの委員に支持されました。つまり、それだけ今回の津波がとてつもなく巨大で、関係者や住民の皆さんに恐怖と深い傷を与えたということを示しています。復興計画に書かれた各種事業については、今後の状況次第で変更されていくかもしれませんが、この高台移転という基本姿勢だけは揺るがないものだと思います。

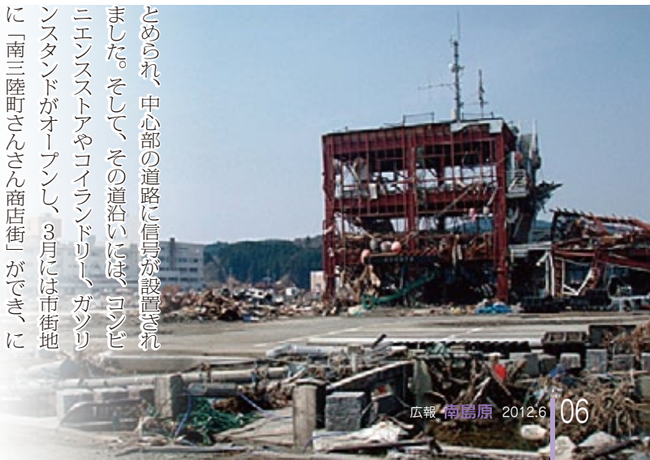
南三陸町の役場は津波により流され、高台にあるテニスコートの上にコンテナハウスを建て、そこを仮設庁舎として業務が行われていました。職場環境はお世辞にも快適とは言えません。コンテナハウスなので夏は暑く、冬は寒い。1～2月ごろの朝方の室内の気温が零度を下回ることもたびたび。室内も狭く、書類を保管する場所はない。また、電気は通っていましたが水道がなく、トイレは仮設。正直、かなり不便でした。ですが、南三陸町の職員の皆さんは、自身も津波の被害者であり、家や財産を失い、また、家族や親族を亡くされているにもかかわらず、町の復興のため、環境が悪い中でも不満も言わず、一生懸命仕事に励んでいました。だから、私たち派遣職員は皆、常々、地元の職員以上に頑張って仕事をしなければならないということを感じつつ日々を過ごしていました。

しかし、復興への取り組みは思ったようには進んではいきません。事業を進めていこうとしても、そのお金がありません。震災前の町の年間の予算は80数億でしたが、今後、南三陸町が復興するためには、10年間で約3千億円が必要だと試算されています。23年末にようやく国の予算が成立し、高台移転などの復興事業については見通しがたちました。けれども、復興は、それだけの事業では成り立ちません。国や県の補助の対象とならない取り組みも必要です。しかし、その予算が確保できません。

また、普通の市や町で簡単にできることでも、被災地では簡単にはできません。被災前と被災後では、全ての状況が変化し、過去の書類やデータも流されてしまっています。一つひとつの手続きに、多くの手間や労力が必要となります。今年度から、復興事業が本格化していきます。南三陸町の佐藤町長は、24年度を「復興元年」と位置付け、高台移転事業を始めとする、復興事業を加速化させていきます。つまり、今後、さらに人的な支援が必要になります。私が、南三陸町にいた間は、各県・市からの長期派遣者が15人ほどいました。4月からは15人に加え、25人の派遣職員を確保しました。しかし、これだけの支援者では、まだまだ足りない状況だと言えます。

ただ、少しずつではありますが、南三陸町は復興に向かっています。私がいた半年間でも、散乱していたがれきが数カ所にまとめられ、中心部の道路に信号が設置されました。そして、その道沿いには、コンビニエンスストアやコインランドリー、ガソリンスタンドがオープンし、3月には市街地に「南三陸町さんさん商店街」ができ、にぎわいを見せています。南三陸町仮設庁舎も完成しました。集落の高台移転についても、住民の合意形成が図られ、用地買収に入ろうとする集落もでてきました。主な産業である水産業についても、漁港の復旧整備計画が明らかになり、漁業の本格的な再開に見通しが立ちつつあります。その他、町内のさまざまな場所で、復興への兆しが見えてきています。

今後、南三陸町は、復興に向けた取り組みを本格的に開始します。おそらく、その道のりは非常に険しいものとなるでしょう。しかし、町の人たちは、東北人特有の粘り強さを持って、復興を成し遂げると思います。私はその成り行きを見守り、そして個人的に支援を行っていきたいと思っています。


南三陸町防災庁舎→

コラム 口之津開港450年

―― 口之津港の壮大な歴史をたどる ――

子どもたちにもわかるよう“ふりがな”・“簡単な言葉”で紹介しています。CHAPTER.4

キリシタン大名 有馬晴信 ～6月5日 没後400年～

有馬歴史研究会会長　佐藤　光典

有馬晴信（1567～1612）
福井県台雲寺蔵

今回、有馬氏について、少し紹介します。

有馬晴信は日本が統一されようとした1567年から1612年までに活躍した戦国大名ですが、これより少しさかのぼった1540年代、日本に鉄砲やキリスト教が伝えられたころに有馬家は全盛を迎えます。晴信の祖父にあたる有馬晴純（はるずみ）の時代です。晴純の『晴』は、ときの将軍足利義晴よりいただいたものです。このころの有馬氏は、島原半島をはじめ現在の佐賀県の有明海沿いなど、6郡21万石と肥前のほとんどを領有していたこともあります。有馬氏の拠点であった島原半島は4万石ですから、いかに巨大な勢力を維持していたかがわかります。

しかし、晴信の時代になると佐賀の龍造寺（りゅうぞう）という戦国大名が勢力を強め、有馬氏の領地は現在の南島原市ほどに減少し、ぎりぎりの立場に置かれてしまいます。

当時の武将は、今で言うと行政マンであり、晴信は地方行政のトップでした。領土を守るため晴信は、数々の経済活性化策を打ち出していきます。

南蛮貿易の再開です。その当時は、ヨーロッパからイエズス会というキリスト教を広めるための集団が日本を訪れていました。ただし、南蛮貿易を推進するためには、キリスト教を布教する宣教師が権限を持っていたため、領内へのキリスト教の布教を認めなければなりませんでした。日本にやってきた宣教師のリーダーであるバリニャーノは、戦国大名の意図は見抜いていましたから、南蛮貿易による有馬領の地域活性化と、財政支援を約束する代わりにキリスト教を有馬領に広めることを晴信に要求しました。宣教師たちも不安定な日本の状況を考えると、キリスト教の拠点を作る必要がありました。

晴信は領内の経済を潤すこと、イエズス会の協力によって龍造寺氏を打ち破ることを目的にキリスト教布教を認めます。そして、有馬の外港である口之津港に再度、南蛮船がやってくることになります。最終的に龍造寺氏を破った晴信は、この時期に日本で初めてのイエズス会の学校「セミナリヨ」を日野江の城下町に誘致します。ここで学んだ少年たちの代表が天正遣欧少（てんしょうけんおうしょう）年使節（ねんしせつ）としてローマへ派遣されます。

宣教師が書き送った報告書を見ると、有馬領には「セミナリヨ」「コレジヨ」が置かれ、ヨーロッパの進んだ文化が続々と伝来しています。日本で最も豪華な教会の建設や、日野江の城下町を通るキリシタン行列の様子などが、事細かに記載されているのです。

400年前の有馬領のことはヨーロッパに行くとよくわかるという、日本の中でも変わった地域が現在の南島原なのです。

当時、ほとんどの日本人たちは地球が丸いことを知らなかった時代。海外に目を向け、有馬のセミナリヨ誘致、天正遣欧少年使節派遣、南蛮船・朱印（しゅいん）船貿易など、日本史上、記録に残る数々の偉業は、一人の地域リーダーの存在無くして生まれませんでした。

今年で没後400年を迎える今、有馬晴信が再評価される時期にきていると思います。

口之津開港450年記念事業
有馬晴信没後450年記念

キリシタン大名サミット

- ●日時：6月2日(土)～3日(日)
- ●場所：北有馬ピロティー文化センター日野江
- ・九州の4キリシタン大名が集結
- ・記念講演／高 祖　敏 明氏（上智大学 理事長）